
翡翠と闇王 その3

Akatuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翡翠と闇王 その3

【Nコード】

N5959Z

【作者名】

A k a t u k i

【あらすじ】

前に上げた「翡翠と闇王」その2の続き?となっております。先にそちらをお読みください。

この話は、BOAからのIF物+ご都合主義から成っています。

（前書き）

開いていただきありがとうございます。作者のアカツキです。

今回もしっかり話を繋げられているか、皆様から見えておかしな文章はないか色々と不安ですが、ひとまず読んでみてください。

今回もイチヤイチヤはほとんどありませんが、ニヤニヤしていただけと幸いです。

それでは、言い訳等々は後書きにて、それではどうぞ。

ユーノの職場である無限書庫、その場所に隣接している部屋で現在は休憩所兼司書長私室となっている場所がある。

元々、無限書庫はユーノ達が現れるまでは、大人数で長期間資料を探すことが前提とされていた場所であったため、このような滞在するための部屋が用意されていた。

それで仮眠用のベッドやソファが設置されているのだが、

「あの、大丈夫だからさ」

「却下だ。おとなしく寝ていろ」

「いや、もう十分休めたから」

「寝ていろ」

「えと」

「それともエクスカリバーの子守唄で寝たいか？」

「・・・お言葉に甘えさせていただきます」

「それでよい」

今はそのベッドの一つに、我らが司書長のユーノ・スクライアが体を横にしており、横でディアーチェが呆れた顔で椅子に座っていた。

事の発端は、無重力空間で気を失って漂っているユーノに司書が気づいたのが始まりだった。

司書達がすぐさまユーノを運ぼうとした時、ちょうど良く無限書庫にディアーチェが訪れ、司書達は彼女にユーノを任せた。

ディアーチェは溜め息を吐き、ユーノを医務室に連れていこうとするが、そしたらこやつ変に恐縮するな、と考えて隣接している休憩所に運んで寝かせたのだ。

そして数時間経ち、ユーノが目を覚まして冒頭のやり取りとなる。

「全く、倒れるまで働くなと言っておろうに」

「ちゃんと休んでただけどなあ………」

「戯け。気絶しておいて何を言っておる」

本当に不思議そうに言うユーノに少々怒気を込めた声音でディアーチェが言い放つ。

休んでいたと本人は言っているが、回りの司書達に聞いた話では急遽入った検索依頼の大半を請け負ったり、ミスした司書のフォロ―に入ったりと、明らかに休息した時間が霞むほどに動きっぱなしだったという。

倒れない方がおかしいという話だ。

「心配するこちらの身にもなれ、馬鹿者」

「馬鹿者って……」

「馬鹿者に馬鹿と言って何が悪い馬鹿者」

正直、これから小一時間ほど説教してやりたいぐらいだ。とディアーチェは思うが、それで余計疲れさせては本末転倒だと自制する。だが、それでは不満が溜まってしまったため、少しでも自分が心配した事を知ってもらいたいと彼を罵る。

実際ユーノが倒れるのはディアーチェが知る限りは二度目なのだ。が、その時と今とでは彼女の心情に決定的な違いがあるのだ。

それは、彼女のユーノに対する想いである。

（全く、我を心配させるなというのに・・・）

前に地球に行った際に自分がユーノに抱く気持ちを理解したディアーチェだが、未だにその気持ちをユーノに伝える事は出来ていない。

心の準備が整わないのが理由らしい。

「自分だけ休んでいるのを司書達に申し訳なく思っているのなら、逆に今は休め。今はアルフと複数の司書がうぬの代理として動いておる。復帰してから挽回すればよい」

横になっている少年の頬を慈しみの微笑みを浮かべ、撫でながら少女は言う。

その言葉が心に染みなのか響いたのか、少年は少女の手の感触に心を落ち着かせると間もなく、再び穏やかな寝息を立てていた。

「・・・寝たか。全く、寝顔は女子のように愛らしいな」

ディアーチェはくすりと笑うと、ユーノから体を離して部屋から退出する。

「あれ、ユーノの看病はいいのかい？」

部屋を出て無重力に身を任せると、近くにいたアルフが声を掛けてきた。

「なに、あやつが起きた時に余計な心労を掛けぬように。と思つてな。ほれ、リストを貸せ」

「・・・・・・・・尽くすねえ」

生暖かい目でディアーチェを見ながら、アルフは持っていたリストの半分を渡す。

「別に尽くしているわけではない。ただ、好いた男を支えたいと思っただけだ」

「本人以外にはそうやって言えるなら、早く告白すればいいじゃないか？」

「出来れば苦勞しておらんわ」

そりゃそうか。と納得すると、アルフはディアーチェと司書達と共に、立ちはだかる無限の書物へと立ち向かっていった。

それから時間が過ぎて漸く依頼が一通り片付くと、ディアーチェは早足（無重力空間だが）でユーノの下へと向かう。

少年はまだ夢の中にいるようだった。

「・・・良く寝ておるわ」

やはり疲れが溜まっていたのかと、疲労した頭を抑えながらディアーチェは思った。

無限書庫で使用する魔法は主に二つ、キーワードにヒットする本を探す検索魔法と本の内容を一気に認識する速読魔法である。

二つ共に魔力消費は少ないが、それに比べて制御や計算が難しい部分がある。

速読魔法などへたに使うと頭がパンクしかけるのだ。

それをユーノ達無限書庫の司書は毎日用いている。さらにユーノは司書の四、五人分以上の量を請け負っているからよけいだ。

「頑張るのは良いが、やり過ぎは自分にとっても周囲にとっても

毒だというのに」

と口には出すものの、ディアーチェはユーノがそれを聞いたところで自重するかと聞かれれば、しない事は分かっている。

以前、ディアーチェはユーノに聞いたことがある。

――何故、そんなに頑張る？

ユーノの返答はこうだった。

――皆が前で頑張ってるから。だから、僕は後ろで皆を支えるって誓ったんだ。

皆、というのは誰かは想像つく。その言葉よりもディアーチェの気を惹いたのは、言った時のユーノの表情だった。

「・・・凛々しかったな」

普段見せない表情に、ディアーチェは思わず魅入ってしまった事を思い出す。

「思えばあの時からだったか。我がユーノを気にしはじめたのは」

言いながら、ディアーチェは寝ている彼へ覗き込むように顔を近づける。

「寝顔が本当に愛らしいな。ユーノ、うぬは生まれてくる性別を間違えたのではないか？」

鼻先数センチの距離で囁く。

だが、とディアーチェは言葉を続ける。

「うぬが女子だったら、我が困る」

ディアーチェの両手がユーノの両頬を包み込む。

「・・・寝ておるな。実は起きてるなどいらんからな」

これから行う行為を思い浮かべてか、少女の頬は赤く染まり、瞳は潤んでいる。

胸は高鳴り、その自身の鼓動の音で彼が起きないかと内心熱い隣で冷や冷やする。

それから数瞬の後、ディアーチェは口を開いた。

「・・・・・・・・ここに誓おう。王として、一人の女子として。ユーノ・スクライアをこの命が尽きるその時・・・・いや、尽きてもなお、愛しつづけると」

そして、ディアーチェは数センチあった距離を縮めて、緊張に震える自身の唇をユーノの唇に重ねた。

数秒、彼の熱と感触を味わってから、ゆっくりと体を離す。

「・・・・・・・・いかん。逆上せそうだ」

そう言うと、少女は手で顔を扇ぎながら覚束ない足取りで部屋の出口へと向かう。

扉に手を掛けたところで、ふと振り返りポツリと呟く。

「もう一度言えるか、不安だな」

そして、ディアーチェは部屋から退出していった。

「・・・・・・・・今の夢じゃない、よね」

E
n
d

(後書き)

さて、如何でしたか？

しっかり読める文章でしたでしょうか？

御指摘等々ありましたら、お気軽にどうぞ。

さて、前のその2の後書きで、次で一旦終わらせると私は言いました。が、

すいません。もう少し続きます。

こんな無計画作者でごめんなさい。

あまつさえ、設定が甘いや時間軸は何処だとか、しっかり説明しろ等などあるというのに。

まだまだ未熟だという事を石にして膝の上に乗せます。はい。

とりあえずGOD発売前か過ぎるまでには終わらせられる様に頑張ります。

・・・GOD買ったらすっちを優先してしまうかもしれませんが。

では、これで失礼します。

次の4、もしくは終でお会いしましょう。

ユーノとデИАーチエをイチラブさせたいと思う今日この頃。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5959z/>

翡翠と闇王 その3

2011年12月19日22時51分発行